

UNREAL STATION

written by HADEYA

1

孤独。それが俺の悩みだ。

黒川幸男は駅で地面を眺めながら思案に耽っている。早朝と言う事もあり、人は疎ら、だ。

どうすれば、孤独から解消されるだろう。答えは簡単だ。友達や恋人を作れば良い。しかし俺に出来るだろうか。この俺に……。

顔を上げた。何気なく、右を向く。赤いコートを羽織った女性が自分の方へ向けて歩いて来る。気のせいだろうか。

彼女は俺を見ている。俺も彼女を見た。美女、だ。だが俺は彼女を知らない。

彼女が笑みを浮かべた。俺は……困惑しながら笑みを返した。

彼女が目の前へやって来て立ち止まった。そして恋人であるかのように告げた。

「素敵なスーツだね。似合ってる」

「……ありがとう」

俺は礼を述べた。彼女は続けた。

「これから会社？」

「ええ、出勤です。来る日も来る日も仕事ばかりで嫌になりますよ」

「じゃあ——」

彼女は言った。俺の目を見て。

「——ズル休みして、私と遊ばない？」

意外な申し出に俺は困惑した。

「どうしようかな……今日は会議があるし、休む訳には行かない……けど遊びたい」

「どうする？」

迷った末、結論を出した。

「会社を休みます。遊びましょう」

「遊びましょう！ 私は沢村栄子。宜しく」

「私は黒川幸男です。宜しく」

彼女が手を差し伸べた。握手を交わした。生温かい感触が右手全体に広がった。

2

走行中の電車——車内の乗客は少ない。俺と彼女……沢村さんは向き合って着席している。沢村さんがペットボトルのお茶を飲んだ。飲み終わると、俺に尋ねた。

「黒川さんは仕事、何をしてるの？」

「大手建設会社のイントラネット保守業務です」

「イントラネットって？」

「社会LANの事です。要するに会社内のインターネットです。それを管理しています」

「すご〜い。パソコン関係の仕事だ？」

「ええ。沢村さんは何をされてるんですか？」

「無職。が今の私の仕事」

「最高の仕事ですね？」

「本当に。ところで——」

沢村さんは唐突に切り出した。

「——彼女はいるんですか？ 黒川さん」

「いません。募集中です」

「じゃあ、応募しちゃおうかな」

「ご冗談を」

「私も彼氏がないんだ。同じく募集中」

沢村さんが身を乗り出した。俺の目を覗き込む。沢村さんは続けた。

「恋人募集中の男女が向き合って座ってる。する事は一つじゃない？」

挑発的な口調だった。俺は……沢村さんにキスした。沢村さんは濃密に舌を絡めて来た。

3

隣駅のトイレから小さな喘ぎ声が聞こえる。声が収まり、間を置いて黒川が出て来た。続けて栄子が出て来る。丁度、到着した電車で俺たちは乗った。

電車内——髪を整えながら俺は言った。

「最高だったよ」

「私も」

俺たちは付近の相席に着席した。栄子が尋ねた。

「これから、どうする？」

「どこか行きたい場所はある？」

「コンビニ」

「何を買うの？」

栄子は首を振った。

「買うんじゃなくて、奪うの」

「奪う？」

「レジの金」

本気かどうか分からない。

「……本気？」

「本気」

「何で、そんな事を？」

「閃きで言っただけ。どう思う？」

「俺は……」

俺は考えた。コンビニ強盗について。強盗を働き、人生を棒に振るう？ そんな事はあり得ない。だが俺なんかが生きて何になるのか。会社で勤務するだけの毎日。空虚な日々。俺はあらぬ考えを振り払った。

「……やめておく」

「分かった」

「……やっぱり、やる」

「そうこなくっちゃ」

栄子は嬉しそうにハンドバッグから包丁の柄を出して見せた。僅かに見える刃が鈍い煌めきを放つ。

「これで店員を脅して。私は店内で成り行きを見守ってるから」

こうして俺はコンビニ強盗をする事になった。理不尽だが納得は行っていた。

4

「レジの金を出せ。早く」

そう言って、スーツの下から包丁を抜いた。店員は言われた通りにした。一万円札を鷲掴みにして、レジから足早に去る。同時に栄子が店外へ出て来た。店の前で俺たちは合流した。

歩きながら栄子が言った。

「金は？」

「奪った。タクシーは？」

「五分後に最寄りの焼き肉店の駐車場に到着」

「よし」

俺たちは焼き肉店に向け、足早に歩いた。自分でも驚くほど冷静沈着で足取りが軽い。こんな事は生まれて初めての事だった。

5

タクシーの後部座席で栄子とキスをする。栄子は俺の耳元で囁いた。

「運転手の財布、そこにある」

知らず知らずの内に俺の手は財布に伸びていた。運転手が急ブレーキを踏んだ。

「財布を返せ！」

俺は運転手に包丁を見せ付けた。

「黙って、運転しろ」

「は、はい」

包丁を握ったまま、栄子にキスした。タクシーの後部座席で俺と栄子は激しく愛し合った。

6

喫茶店に俺と栄子はやって来た。エスプレッソを飲みながら、会話が弾む。

「でさあ、部長はタコみたく顔を真っ赤にして、こう言う訳。この給料泥棒が、って。俺は思ったよ。そう言うあんたは給料警察だろう、って」

言いながら笑った。栄子も微笑んでいた。笑いの後に沈黙が漂う。俺は重要な、とてもとても重要な会話を切り出した。

「……実は俺、秘密があるんだ」

「私、口は堅いよ」

「誰にも言ってない秘密」

「一人で抱え込まないで。どんな秘密？」

秘密——過去に犯した罪。仲間と共にナイトクラブで女性を強姦した。女性は被害届けを出した。仲間は逮捕されたが、俺だけが逮捕されなかった。皆、ハイになって記憶がウロ覚えだったからだ。俺は逮捕を恐れた。怯えながら生きて来た。この年まで。誰にも打ち明けた事がない秘密。栄子に言って、楽になった。

「言って、楽になったよ」

「良かった。私も秘密があるの」

「何でも聞くよ」

栄子はエスプレッソが注がれたカップを受け皿に置いた。そして秘密を語り始めた。

「……私、幸男さんの事を知ってたの」

「知ってた？」

「知ってて、今朝、わざと駅で接触したの。目的があって」

「目的って？」

「これ」

そう言って、栄子はハンドバッグから財布を出した。財布からカードを出し、テーブルに置く。

「……これは？」

「会員証」

「何の会員証？」

「イルミナティ」

「イルミナティ？」

「フィリピンを拠点にしてる。活動内容は諜報関係」

「つまりスパイって、事？」

栄子は頷いた。そして淡々と続けた。

「我々には新たなミッションに従事する勇者が必要だった」

「それで、俺にコンビニ強盗を持ち掛けた？」

「幸男さんの事は全て知ってる。島野建設の下請けに勤務する会社員である事も、水曜日に近隣住民のゴミ捨てを手伝う、お人好しである事も」

「……ミッションの内容は？」

「テストには合格。あとはミッションを熟すだけ」

「ミッションの内容は？」

栄子がエスプレッソに手を伸ばした。その手を俺が叩く。エスプレッソの注がれたカップが遠くへ飛んだ。

「ふざけるな！俺は人生を棒に振るっただぞ！」

「それは違う。人生を棒に振るうのはこれから」

頭がクラクラした。視界を闇が覆った。

7

栄子と別れ、俺は一人で歩いている。街中を。スレ違う通行人、全員が俺を繁々と眺める。

「何を見てる……何を見てると言ってるんだ！」

通行人が足早に去った。なお歩き続ける。前方に立つ複数の警官と目が合った。素通りするつもりで俺は歩いた。

「ちょっといいですか？」

警官が道を塞いだ——職務質問。

「工作中ですか？」

「ええ、取引先に書類を納品したところです」

「取引先はこの辺に？」

「ええ、近くの個人宅です。こんな真昼間に職務質問ですか？」

「今朝、隣町でコンビニ強盗が発生しましてね。犯人はグレーのスーツを着た会社員風の男性みたいなんです。おや？ あなたもグレーのスーツですね」

そう言って、警官は笑った。引き攣った笑みを俺は浮かべた。

「それでは会社に戻りますので」

「ご協力に感謝します」

俺は足早に去った。心臓がバクバク言って……今にも喉から飛び出そうだった。

8

地下鉄の最寄り駅に着いた。エスカレーターを降りて行く。フロアを横切り、改札を潜って構内へ。スマホが着信した。会社からの連絡だった。無断欠勤を不審に思ったに違いない。この電話に応じなければ、さらに不信感が募るだろう。

俺は電話に応じた。

「黒川です」

「本日はまだ出勤されていないようですが？」

「それが発熱があって病院に向かっているところです。連絡できず、申し訳ありません」

「本日は病欠扱いで宜しいですか？」

「ええ、そうして下さい。具合が悪いので」

「お大事になさって下さい」

「失礼します」

通話を切り、深呼吸を一つした。心臓は依然、バクバク鳴っている。不安と焦りで気が狂いそうだ。その時、駅構内にアナウンスが流れた——隣駅で発生した人身事故の影響で電車がストップしているとの内容だった。

思わず、舌打ちを鳴らした。俺は落ち着かない様子で爪を噛み、周囲をキョロキョロ見回していた。

9

電車内でドア付近に立つ。ドアの上の小型ディスプレイが今朝のコンビニ強盗のニュースを報じていた。唾を呑んだ。ディスプレイに防犯カメラの映像が映し出される。そこには白黒のカクカクした映像で俺が映し出されていた。俺は店員に包丁を見せ付け、レジの金を鷲掴みにしている。続けてキャスターが警察が犯人の特定を急いでいる旨、アナウンスした。

俺は周囲の乗客を見た。乗客全員が俺を見ている。歩いた。先頭車両へ向け。じっとしていられなかったからだ。

10

電車を降りると前方に警官の姿が見えた。男性が俺を指差しながら警官と何かを喋っている。警官が叫んだ。

「ちょっと、そのあなた！」

走った。全力で。線路に飛び込み、突っ走った。線路の上を全速力で走って行く。

走りながら考えた。この先、どうなるか。警察は犯人を特定した。逮捕は免れない。逃げるしかない。だが、どこに逃げると言うのか。

その時、「ファアン」と言うクラクションがトンネルに鳴り響いた。続けて、急ブレーキを踏む音。背後を振り返る。

と、同時に先頭車両のヘッドライトの眩い光が俺を包み――

11

そこで目が覚めた。夢だったのだ。栄子も、コンビニ強盗も何もかも。

安堵した。枕元の置時計を見る。時刻は5時25分。アラームが鳴るまで残り35分。俺は早起きする事に決めた。

スーツを羽織り、ネクタイを着用する。ジャムを塗った食パンを頬張り、ショルダーバッグを肩に担ぐ。さあ、出勤だ。今日も働き、明日も働く。働いて寝るだけの毎日。ウンザリする毎日……。

12

早朝の駅は人も疎らだ。俺は立って地面を眺めている。眺めながら思案に耽っている。孤独。それが俺の悩みだ。どうすれば、孤独から解消されるだろう。答えは簡単だ。友達や恋人を作れば良い。しかし俺に出来るだろうか。この俺に……。

顔を上げた。何気なく、右を向く。赤いコートを羽織った女性が自分の方へ向けて歩いて来る。気のせいだろうか。

彼女は俺を見ている。俺も彼女を見た。美女、だ。だが俺は彼女を知らない。

この光景を俺はどこかで見た事がある。強いデジャブに囚われながら俺は彼女から目が離せずにいる。一体、俺はこの場面をどこで見たのか……。考えても考えても答えは見付からなかった。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872